

〔課題演習抄録〕

中学校社会科における「深い学び」の実現をめざす授業実践 —教師の「問い」と生徒の「問い」に着目して—

福 菌 駿 平
Shumpei FUKUZONO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：深い学び、問い、問題解決学習

1 研究の目的

本研究では、社会科授業における「深い学び」の実現の観点から、教師の「問い」が生徒の「問い」にどのように転換されるかについて、授業分析を通して検討することを目的とする。また、研究を進めるにあたっては、生徒自身の「問い」を重要視するという点から、初期社会科の「問題解決学習」の理論を基盤にしつつ考察していく。

2 研究の計画

M2 前期	4・5 月	研究構想及び先行研究の検討
	6・7 月	授業実践Ⅰ
	8・9 月	授業分析及び課題の明確化
M2 後期	10・11 月	授業実践Ⅱ
	12・1 月	授業分析及びまとめ

3 研究の内容

(1) 先行研究

問題解決学習を方法論とした上田（1952）は、『問題』は、児童がその生活を展開してゆくにあたって、根本的に直面する『問題』でなければならぬ。」と述べており、国家が規定した教育内容を系統的に教え込むような「問題」の在り方について否定し、「問題」がいかに子どもの生活に根付いたものとして捉えられるかを重視してきた。

また、重松（1967）は、「問題」に関して、「主体の存在を妨げるものの存在を意識し、それを乗り越えようとする要請があらわれたとき、その要請を問題というのである」と述べている。つまり、生活経験を基にした生徒自身の中の認識のズレを立て直したい（解決したい）と思う部分に問題が

生じるとし、切実な問題解決を核心とするべきであるとしている。

これらのような上田や重松の「問題」の規定を受けて、谷川（1993）は、改めて問題解決学習を、「生徒が直面している問題を解決することを通じて、生徒たち自身が自らの経験や知識を再構成して発展させようとする学習」と定義している。谷川もまた、生活における具体的な「問題」の解決を学習活動の中心に据え、子どもたちに切実性をもたせるような、生活経験と結びついた「問題」の必要性を主張している。

問題解決学習の理論における「主体的・対話的で深い学び」の方略として原田（2017）は、深い学びには問い（課題）の役割が大きいと、単元計画において十分な課題設定の時間を確保することが重要であると主張している。加えて、「課題設定を子どもに任せきりにすると、往々にして授業のねらいとのズレが生じてしまう」と述べ、これを防ぐために、見学（観察）・調査・聴き取り等の活動を通して、課題を発見させたり、教師による教材（実物も含む）の提示から課題を発見させたりする方法があることを提示している。しかしながら、この方略が中学校において、限られた時数内かつ全ての授業で実現可能であるか否かという点で一考を要すると考える。

一方、社会科授業における「問い」を検討する実践として、吉川（2015）は、「問い」に対する生徒の「応答」を受けての指導展開を探っている。吉川は、①問いと応答の視点のズレこそが追究発展の源泉であり、教師側は常にこうした視点のズレを起こすように働きかける、②様々な視点からの「応答」をつなぎ合わせて共同の理解を構築する、③生徒たちの応答から発展の足がかりになるものを拾い、そこから再発問を試みたり、他の応

答との関連を考えさせたりする、という3つの指導展開方策の有効性を明らかにしている。実践として、教師の「問い」とそれに対する生徒の「応答」における指導展開の形式が検討されているが、「深い学び」の見地からの検討は皆無である。

(2) 授業実践（歴史的分野）

対象	M市立K中学校第1学年
日時	11月14日（水）1・3校時
単元名	中世「武士の世のはじまり」（5/5時間目）
主眼	○平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて武士団の棟梁であった平清盛と源頼朝のうち、どちらが棟梁として優れているかを視点のつながりを見つける活動を通して、明確な根拠を基に決めることができる。

導入では、平清盛と源頼朝のどちらの棟梁を支持するかについてのLINEのトーク画面でのやりとりを提示し、「自分はどちらの立場か」という質問を投げかけた。これにより、生徒自身が平清盛と源頼朝のどちらを支持するかと、その理由について追究するという学習の見通しをもたせた。

展開では、優れていると評価する棟梁について、その根拠を、教科書等を基に調べさせた。調べた内容を基に、同じ意見の者同士、異なる意見の者同士の順で小集団による主張の交流を行った。その後、全体で討論形式による清盛派・頼朝派それぞれの主張の交流をした。

終末では、交流した内容を踏まえ、優れていると評価する棟梁と、その根拠について記述させた。

4 成果と課題

(1) 成果

本実践では、「平清盛と源頼朝のうち、どちらが棟梁として優れているか」という教師の問いを、生徒自身の問いに転換させ、討論的な授業展開によって社会科授業における「深い学び」を促していくことを意図した。特に本実践の授業記録を基に生徒の「問い」が現れたものを分析した結果、以下の2点が成果として挙げられる。

1点目は、全体交流において、生徒の発言をきっかけに全体に新たな視点がもたらされ、それに関する「問い」を追究する場面が見られたという点である。授業記録を分析した結果、全体交流の時間に清盛派の生徒から「自分の親族を殺害するような頼朝は評価できない」（94W）という内容の発言があった。この発言をきっかけに、「武士の世界においてプライドなど気にする必要はない」

（110U）や「頼朝にも御家人を大切にしている道徳的な一面があった」（119N）などの、頼朝の性格的な面に視点を置いた討論に発展した。このように、生徒同士の関わりにおいて表出した新たな視点か

らの「問い」を追究したことが、深い学びにつながっていったと考えられる。

2点目は、自分の主張の優位性をより強固にするために、複数の根拠を見出そうとする姿が見られたという点である。これは「武士の地位を上げたのは清盛である」（112S）という地位の基盤に関する面や、「頼朝は清盛の摂関政治とはまったく違う政治の仕方だった」（119N）という政治的側面の発言が該当するものとして挙げられる。これらは、主張を強固にするための根拠として他者の発言を受けて生徒自身が探り出したものである。「他者の主張を上回るためにどのような根拠を提示すべきであろうか」、「自身の支持する棟梁の評価できる部分はどこにあるのか」という「問い」を意欲的に追究しようとしていたという点で、教師の「問い」が本質的な部分で生徒の「問い」として転換されていたと考えられる。

(2) 課題

以下の2点が課題として挙げられる。

1点目は、他者の意見を聞き、自らの主張を再構成する部分に不十分さが見られたという点である。授業記録を分析すると、生徒が自らの「問い」を追究していこうとする場面が見られる一方、ワークシートの記述内容では、一単位時間での主張の変化がなく、一面的な内容の記述に留まるものが数多くあるなど、生徒自身の「問い」による追究活動が十分であるとは言いがたいものであった。

2点目は、筆者の指導技術の問題ではあるが、筆者が発言し過ぎているという点である。特に、全体交流の場面で、「頼朝は、義経や奥州藤原氏を滅ぼして自分の地位を高く上げようとした。弟や協力関係を結んできた人々たちを滅ぼすのは考えとしてどうなのか」（94W）という発言に対して、他の生徒の発言を待たずに「道徳的な側面で頼朝はよくないんじゃないかってこと？」（101T）と発言している。このように授業記録を見てみると筆者の発言により生徒の思考を阻害している場面が数多く見受けられた。

主な引用・参考文献

- 原田智仁 2017 社会科で身につけたい「資質・能力」を育成する学習過程の工夫—主体的に課題をみつけ解決する意識の育て方— 社会科教育研究 No. 694
- 重松鷹泰 1975 授業方法論 明治図書
- 谷川彰英 1993 問題解決学習の理論と方法 明治図書
- 上田 薫 1952 社会科の理論と方法 岩崎書店
- 吉川幸男 2015 社会科学習における「問い」と「応答」の指導展開 山口大学教育学部研究論叢（第3部） 65巻